

キジハタの効率的蓄養技術の開発及び 流通改善による高付加価値化

南部智秀¹(研究代表者:写真)、山本義久²

1 山口県水産研究センター外海研究部

2 水産研究・教育機構 水産大学校 水産流通経営学科



研究の目的

キジハタ(図1)は安定的に大量漁獲することが難しいため、蓄養によってこれを安定供給しようとする業者が現れ始めました。そこで、本研究ではより簡易な蓄養技術の開発として、無給餌で品質を維持できる蓄養期間の把握を目的としました。



図1 高級魚として流通されるキジハタ

研究の成果

無給餌期間が6週間を経過すると体重減少率【単位%:(蓄養期間終了時の体重-試験開始体重)/試験開始体重×100】は10%前後になりました(表1)。また、粗脂肪量および遊離アミノ酸量の経時変化には、明瞭な傾向は認められませんでした(図2、3)。

表1 体重減少率の推移

	体重減少率(%)	
	1回次	2回次
1週間後	-4.93	-
2週間後	-3.87	-
3週間後	-5.91	-5.21
4週間後	-5.95	-7.06
6週間後	-9.11	-10.68
8週間後	-9.74	-12.46

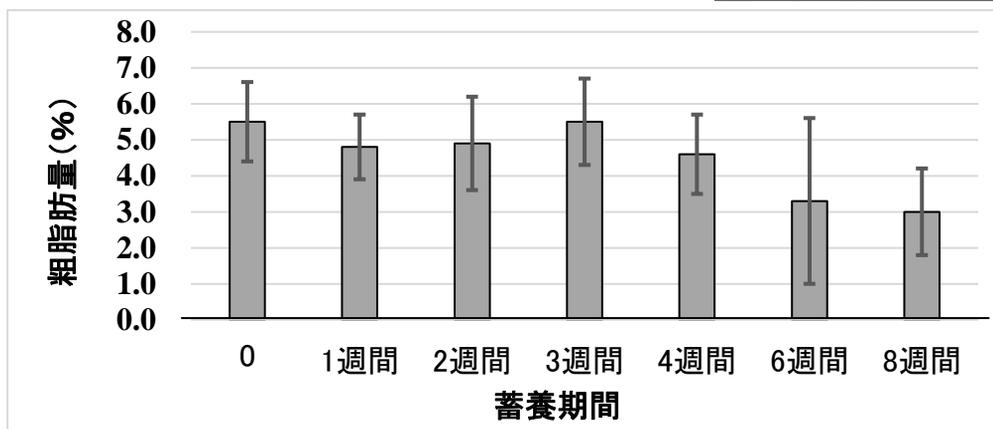


図2 キジハタ蓄養試験における粗脂肪量の経時変化

無給餌期間が4週間以内であれば体重、粗脂肪量および遊離アミノ酸量からみた品質は、漁獲直後のそれと大きく変わらないことが解りました。

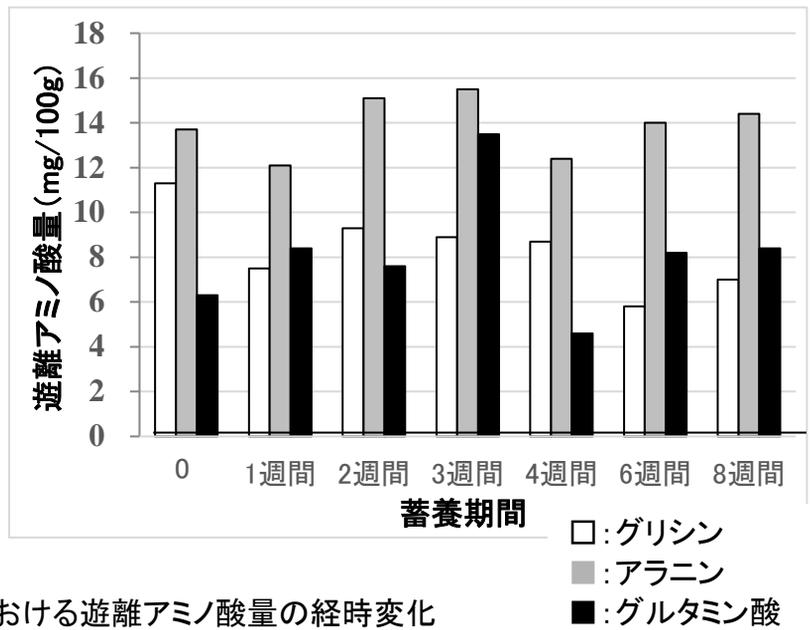


図3 キジハタ蓄養試験における遊離アミノ酸量の経時変化

波及効果・政策提言

- 無給餌による蓄養は、給餌コストや労力が不要で、特に専門的な知識や蓄養技術がなくても、最低限の飼育設備があれば誰でも容易に取り組むことが可能です。
- 蓄養期間が4週間以内であれば、漁獲直後の品質を大きく損なうことなく備蓄管理ができるため、価格調整や安定供給、販路拡大が期待できます(図4)。
- 平成30年10月1日から31日まで長門市で開催されたイベント「きじはた祭り」では、当該蓄養技術が活用されブランド化の推進に寄与しました。



図4 研究成果の波及効果